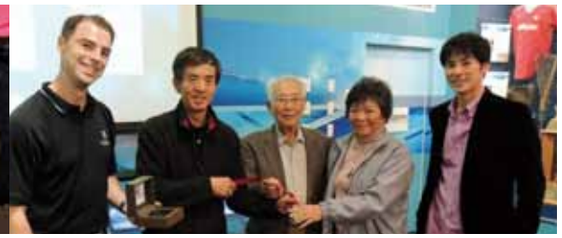
バンクーバー朝日軍・嶋正一さんの名前が BC Sports Hall of Fameに登録される

BY GEPPO JAPANESE EDITOR · OCTOBER 18, 2014



嶋 洋文　　イボン
映画007にボンドガールで出演

10月16日、BC Sports Hall of Fame（スポーツ殿堂）で同ミュージアム・キュレーターのジェイソン・ベックさんよりバンクーバー朝日軍のメンバーであった嶋正一さんの甥2名と姪1名の方々にメダルが贈られた。

バンクーバー朝日軍は2003年にカナダ野球殿堂入りし、2005年にはBCスポーツ殿堂入りを果たした。その際に、嶋正一さんの名前は名字しか分からず、今日まで「Shima」という名前で登録がされていた。メダルの受け取りには、日本から正一さんの甥にあたる洋文さん、英洋さんと洋文さんの息子の雄吾さんが出席し、ケロウナ在住の姪・イボンさんも駆けつけた。　http://jccabulletin-geppo.ca/shima-shoichi-bc-sports-hall-of-fame-j/

嶋家の歴史

洋文さんの話によれば、正一さんは朝日軍が創部された1914年から少なくとも1916年までチームに所属していた。チームでのポジションは不明。嶋家の歴史は和歌山県出身の嶋正一さんの父・清三郎さんが1907年に単身でカナダに渡ったことに遡る。1912年に正一さんの母と長男の正一さんがカナダに渡り、翌年（1913年）に次男の成一さん（英洋さんの父）と三男の寿男さん（イボンさんの父）が渡加した。四男の義雄さん（洋文さんの父）は1914年にカナダで誕生。正一さんは20歳の時に一時帰国し、結婚後カナダに戻りホテルバンクーバーで働いたが、1924年に日本へ永久帰国した。その他の家族のほとんども1930年代に日本に永久帰国をし、三重県木本町（現熊野市）に居を構えた。三男の寿男さんだけがカナダに残って生活を続けた。正一さんは日本に帰国後に居住した三重県木本町で「木本（きのもと）巨人軍」と言う名の素人野球チームを結成し、洋文さんの父・義雄さんも所属していた。洋文さんは「戦争で強制移動させられた朝日軍のメンバーが、カナダ各地の収容所でそれぞれ野球チームを結成していったのと同様に、正一の朝日軍での活躍の記憶が、このような形で、日本の地元でも、彼の想いを引き継ぎ具体化結実させられたのでは」と話した。

メダルの存在を知る

その後の調査を進めて行くうちに、BC Sports Hall of Fameのウェブサイトにたどり着き、そこには「Shima」と名字の表記のみがされている事を知り、洋文さんは団体に連絡を取った 。メダルに関しては、テッド・フルモトさんから話を聞き、ナショナル日系博物館に問い合わせも行ったが所蔵はされておらず、名前がわからなかったということでメダルは作られなかったと言う事が判明し、この度メダルが作られ、授与されるに至った。このようにメダルを受け取る事が実現した事に関して英洋さん、洋文さんは「信じられない」と驚きを隠せない様子であった。ケロウナ在住の正一さんのいとこイボンさんも「すばらしいと思う。洋文がこのことを知らせるまで全く知らなかったし、気にも留めていなかった」と喜びを語った。一行は朝日軍OBのケイ上西さんとも面会をし、先日新・朝日軍が再結成されたという話を聞き、「とてもすばらしい事だと思う」と感想を述べた。BC Sports Hall of Fameのウェブサイトにある朝日軍メンバーリストはすでに修正され、現在Shoichi Shimaと名前が記載されている。BCプレース内にあるミュージアムのインタラクティブディスプレイのリストも近々更新される予定。また、今回写真の何枚かがナショナル日系博物館にコレクションとして追加され、こちらもオンラインでの公開の準備が進んでいる。

94年越し野球交流

日系「バンクーバー朝日軍」来日

親善試合の後、記念品を交換するバンクーバー朝日軍（左）と足利リトルシニアの選手たち＝栃木県足利市＝

野球を通して、日本とカナダの交流を深める親善試合が7日、94年ぶりに開かれた。カナダに住んだ日系人が1914年に結成し、太平洋戦争の勃発とともに消滅した「バンクーバー朝日軍」。昨年の秋に再結成され、13～15歳の日系カナダ人15選手からなるチームが1921年以来の来日を果たした。

栃木県足利市内の球場で地元の同世代のチームと対戦した約1世紀ぶりの親善試合。朝日軍は3－5で逆転負けしたが、カズ・カダさん（13）は「日本に来たのは初めて。とても礼儀正しい国で感動した」。試合前、本塁付近に整列して帽子を取ってあいさつする日本の習慣に驚いたという。カーター・カズヒロ・カダワンさん（14）も初来日。「自分の中に日本のルーツがあるのは誇り。ここで学んだことを持ち帰りたい」

94年前の来日時は東京、大阪、北海道などを回ったが、今回は足利市を皮切りに、横浜市や奈良県などを訪れ、16日の帰国まで各地で親善試合や刻流を重ねる。（村上尚史）

【2015年3月8日　朝日新聞の記事より】

THE EMBODIEMENT OF THE JAPANESE-CADADIAN SPRIT THE ASAHI BASEBALL TEAM

『戦後70年』

伝説の日系人球団が再結成

カナダ,94年ぶり来日へ

第2次世界大戦前にカナダで人気を誇りながら戦争により消滅した伝説の日系人野球チーム「バンクーバー朝日軍」が、創設100周年となる昨年に現地で復活した。再結成したチームは少年が中心で、3月上旬に来日する。1921年以来94年ぶりとなる日本遠征では親善試合を行い、友好を深め合う。

朝日軍は日本人移民を中心に14年に結成された。当時、日本人移民は弁護士などの専門職や公職に就けず、主に従事した漁業や林業でも雇用を奪うとして反感を持たれた。だが、差別と排斥の時代でもフェアプレーに徹し、現地の人々の心を捉えたチームは日系社会の誇りとなった。戦前の朝日軍に所属したただ一人の存命者、上西功一（かみにし・こういち）さん（93）は「審判に文句を言うなと指導された」と述懐する。

野球は英語の不得意な日系1世と、日本語の不得意な2世の間で共通の「言語」だった。日系人と白人がともに観戦するなど世代や人種を超える懸け橋にもなった。39年にデビューした上西さんが「朝日に入ることは日系人の夢。初めてユニホームをもらった夜は感激して眠れなかった」と回想するほど憧れのチームだった。

戦争が始まると日系人は敵性外国人として強制収容所に入れられるなど、41年に消滅。戦後に語り継がれたチームは2003年にカナダ野球殿堂入りを果たした。映画「バンクーバーの朝日」で再結成の機運が高まり、公開前の昨年10月、約30人の少年が創設時と同じロゴが胸に入ったユニホームに袖を通して活動を再開した。

発起人の一人、小川学（おがわ・まなぶ）さん（38）は「映画がきっかけとなって一気に仲間が増え、復活できた」と説明する。アダム・イノウエ君（14）は「朝日の歴史を知って、このユニホームを着たいと思った」と別のチームから加入したという。

日本遠征は10日間の日程で神奈川、奈良などのチームと交流する。新潟にルーツがあるというアレック・カミング君（15）は「日本での試合に親戚が来るので会いたい」と青い瞳を輝かせ、鈴木丈大（すずき・じょうだい）君（14）も「野球を通して日本と触れ合える」と楽しみにする。

かつて本拠にしていたパウエル球場は公園に変わり、球場の近くでにぎわいがあった旧日本人街は閑散としている。チーム創設から1世紀の時は流れたが、地元の日系人らの尽力によってチームはよみがえった。上西さんは「孫ができたみたいでとてもうれしい」と表情を緩めた。（バンクーバー共同＝伊藤光一）

日加バッジ

バンクーバー新朝日が 駐日カナダ大使を表敬訪問

Dear Michi　　*新朝日軍発起人メンバー*

I am very sorry you have not received any email from me. How rude of me. I am sorry. I really did think I replied. Sorry about that.
Happy New year and thank you for your email. I guess we were supposed to meet each other as the Asahi project is connected to both of us.
I have included one of the people who helped start the Asahi project, Sammy Takahashi. His is fluent in Japanese and can help us connect in Japan.
Anyhow, Michi San. Let’s try and meet in Japan.
Thanks.
Josh Coward

Dear Michi　　*新朝日軍発起人メンバー*

日本滞在中はお世話になりました。私たち、バンクーバー新朝日軍は日本での全日程を終え、無事、バンクーバーに戻って参りました。これを機にバンクーバー新朝日軍が日本とカナダの友好のシンボルとして活動できることを切に望んでおります。またの機会にお目にかかります。　　サミー高橋

＜娘とのバンクーバー＞　片山信子

今年も遊学に行こうか迷ってましたが、決心をしたきっかけは娘がバンクーバーに行ってみたいと言うひと言でした。英語が出来る娘が一緒でなかったら、例え行ったとしても、遊学だけで帰国したでしょう。よく考えると　娘と二人きりで旅行をするのは今回が初めてです。遊学が終わる前に娘がバンクーバーに来たので、皆さんに紹介でき、先生やスタッフそれに遊学の仲間と仲良くなれました。娘と2週間過ごしましたが、その間先生方のご自宅に招かれたり、遊学仲間のコンドミニアムに遊びに行ったり飲みに行ったりと二人だけだったら出来なかった予想外の楽しい事が沢山ありました。観光地はビクトリアに1泊しましたが、結構珍道中で、ビクトリアに行くバスを間違えてしまい。運転手さんが必死になって自分の携帯電話で、タクシーを呼んでくれました。電話代もコーヒーならもらうけどお金はいらないよと受け取りませんでした。本当にいい方で、あの笑顔が忘れられません。タクシーで船乗り場に到着したのが5分前で走りました。案内の方が「最後の2人がもうすぐ乗ります」と無線機で連絡しながら一緒に走って連れて行ってくれました。親切な皆さんのおかげで無事ビクトリアに行けました。感謝です。
ビクトリアといえば、ブッチヤーガーデンです。去年行った時より2ヶ月も遅かったので花の種類が全然違って新鮮でした。何度来ても最高に楽しめるところです。バンクーバーでは、グランビルアイランドが1番のお気に入りでした。新鮮で美味しい食べ物や洋服、ワイン、地元のおみやげなどの他に、毎日出てる大道芸がとっても楽しみでした。娘はヨガに何度か通ったので、私はその間グランビルやダウンタウンに行ってました。ダウンタウンで、ニッカセンターと言う日本人向けの英会話教室に何度か行きました。娘と2週間泊まったB&Bのオーナーが凄くいいご夫婦でした。夕方早く帰ったとき、一緒にご夫婦お気に入りのテレビシリーズのビデオを見せてくださいました。二本で3時間越え。でも楽しかったです。フラメンコも連れて行ってくださったり、花火も見に行きました。それにお寿司屋さんでご馳走してくださいました。帰国する日の朝は涙（私が一番泣きました）のお別れでした。帰る時はおみやげと楽しい思い出で、スーツケースが弾けそうでした。